

予備校の教壇に立って、三十数余年の歳月が経過しました。この間、コーパス言語学（電子化された言語資料の集積体を言語学の視点から分析する学問）が脚光を浴び、従来の指導内容に小さくない影響を及ぼしました。

言語は流動的なもので、絶えず変化の波に洗われています。このことはコーパスによるデータ分析を眺めれば一目瞭然です。現代英語といわれるものでさえ、10年という短い時間の経過のなかにも変化が起こっていることが統計的に実証されています。

しかし幸いなことに、「言語は変化する」という命題には「言語研究もそれに応じて進歩する」という事実が付随しており、次々と新しい研究成果がわたしたちのまえに提示されています。

英語を学ぶ者たちに文のしくみや特性を理解させたいと願うことは教育の現場で英語を教える者たちの願いですが、最新の知見に基づいた現代英語の姿を語ることもまたみずからに課さなくてはなりません。

しかし、学習参考書を見ると、旧態依然とした文法・語法情報が幅をきかせている現状がありますし、教師みずからが受験生のときに身につけた知識の切り売りをしているという現実もあります。

筆者はこれまで「日本人の英語」をたくさん見聞きしてきましたが、そこには「共通の誤り」というものがあります。大げさに聞かえるかもしれませんが、脈々と受け継がれている誤解や曲解が存在しているのです。

ふりかえてみますと、筆者自身、自分のおかしたミスティクをさまざまな角度から眺めることで、みずからの英語力を養ってきたように思います。タイトルにもあるように、ミスティクが底力となって、英語のしくみや発想をより深く理解することができるようになったのです。失敗が成功の重要なファクターであるように、ミスティクは上達に欠かせぬ要素ではないでしょうか。

こうしたこともあって、予備校における英作文（英語表現）の講義では、「自分のつくった誤文をいろんなアングルから眺めてみなさい」とか「ミスティクを深掘りしてみよう」と指導することになります。結果、社交辞令まじりの報告かもしれませんが、多くの学生たちが「おかげで伝わる英語を身につけることができるようになった」といつてくれます。

本書は、学習者がおかしがちな誤りに注目して、言語事実に基づいた「正しい英語」を提示しています。読者のみなさん、とりわけ中学校、高校、予備校の先生、そしてこれから英語教育にたずさわろうとしている大学生たちのお役に立てるのなら、これにまさる喜びはありません。

最後になりますが、さまざまな情報を提供してくださったインフォーマントのみなさん、最終段階で英文のすべてに目をおして助言をくださったキャサリン・クラフト（Kathryn A. Craft）さん、本企画を手際よくまとめてくださったプレイスの山内昭夫社長に感謝の言葉を述べさせていただきます。ありがとうございました。

2021年初秋

里中哲彦（さとなか・てつひこ）